

研究報告

成人看護学演習における演習補助者との連携教育

—KH Coder を用いた演習補助者のアンケートの分析から—

松田麗子、大谷かがり、堀井直子、杉田豊子、荒川尚子、近藤暁子、

江尻晴美、梅田奈歩、中山奈津紀、牧野典子

中部大学生命健康科学部保健看護学科

要 旨

近年、実習施設と看護教育機関との協働の必要性が求められている。本学科では 2010 年度より学内演習に臨床現場で働く看護師(以下、演習補助者とする)を導入し、2 年間にわたる学生による学内演習の評価を分析した。その結果、学内演習に演習補助者を導入した取り組みは成人看護学演習授業の質の確保につながっている可能性を示唆している。本論文は、演習補助者の視点から成人看護学演習を分析し、演習における大学と臨床との連携や協働の現状について示唆を得ることを目的とした。対象は、成人看護学演習に授業の補助者として参加した臨床看護師 44 名で演習後に自由記載のアンケートをとり、テキストマイニングソフト KH Coder を用いて分析を行った。その結果、総抽出語数は 7,183 であった。アンケートの中で頻回に出現した上位 100 語の頻出語を抽出し、共起ネットワーク図を作成した結果、5 つに分類することができた。これら 5 つの分類を検討した結果以下のことが導きだされた。本学科の成人看護学演習では、臨床で使用されている物品を用いて看護実習室を整えており、臨床に近い環境を設定している。演習補助者はそれを踏まえ、学生に教科書や資料の中で示されている抽象的な方法について、臨床で使える具体的な方法論を示している。成人看護学演習の教育環境は臨床に近い環境設定をしているが、ある一定の限界があり、演習補助者の導入により、その限界は緩和できることが示唆された。

1. はじめに

1. 臨床と教育の連携・協働の背景

1990 年代より看護系大学が急増し、本学のように実習施設を持たず他施設で実習を行う大学が増え、この頃から臨地実習施設と実習施設を持たない看護教育機関との協働の難しさが指摘されるようになった。文部科学省は 2002 年の「看護学教育のあり方に関する検討会報告書」において、看護学教員の看護実践能力の向上や大学と実習施設との協力と連携の必要性を述べている¹⁾。これ以降、看護教育における臨床と教育のユニフィケーションが注目されるようになった。たとえば、2003 年に神奈川県は「特色ある学校づくり」

をめざし、民間と行政が力を合わせて看護基礎教育の質の向上を目的としたユニフィケーションシステムを段階的に導入した²⁾。

臨床と教育の連携や協働に関する研究では、教育機関の教員の看護実践能力の向上とユニフィケーションの連動性について論じている³⁾⁻⁵⁾。これらの研究では、看護教員の看護実践能力を向上させ、その能力を看護教育に生かすことを推し進めている。

一方、臨床実習施設と教育機関の連携教育を推し進めるためには、実務に携わっている臨床看護師と看護教員が協働して学生を教育していくことも重要となる。榎本⁶⁾は、看護技術演習に臨床

松田麗子、大谷かがり、堀井直子、杉田豊子、荒川尚子、近藤暁子、江尻晴美、梅田奈歩、中山奈津紀、牧野典子

看護師を演習補助者として導入した効果について、演習補助者 14 名の自由記載のアンケートを研究者自身がコード化しラベリングして分析した。榎本によると、演習補助者は演習で看護技術の手順や工夫点、重要なポイントを学生に教える上で学生の個性を理解し、その思考やパターンをつかみ、行動の意味を考えることが重要だと考えている。演習補助者はこの一連の過程で得た「こつ」を使って学生を指導する。また、結果としてこの過程が演習補助者の臨床での看護師としての思考や行動を振り返ることにつながっていることも分かったという。

しかしながら、臨床看護師が教育機関に出向き、学生に講義や演習で直接教育に携わることに関する研究や報告は未だ少なく、連携教育の効果や課題を明らかにする更なる研究が必要である。

2. 成人看護学領域における演習の概要とその取り組み

2010 年厚生労働省による「今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書」⁷⁾では、臨床現場の看護職員の活用と臨地実習の指導体制について、高度な実践能力を持つ看護職員を活用することの効果述べている。本報告書によると、学生の実習の質を向上するためには、学内演習の時から臨床の実習指導者が関わることができるシステムや、看護職員を教員として活用するシステムを作る必要性があるという。

2010 年度より学生の看護技術能力の更なる充実をはかるために、本学科では学内演習に臨床の看護師を演習補助者として導入している。成人看護学演習は 3 学年の春学期開講で、その目的は、臨床現場において汎用性の高い看護技術の習得にある。具体的には学内の看護実習室にて「創傷処置」「インスリン自己注射」「輸液療法」「一時吸引」等の看護技術について、臨床でよく使用する物品を用いて実践的に学んでいる。この演習補助者は主に本学科の学生が臨地実習を行っている施設に勤務する看護師であり、学生の実習指導を担当している。演習補助者の役割は、各演習で 4 から 6 名程

度の学生に、看護技術を指導し助言を行うことである。この学内演習においては、演習補助者の指導の円滑化を図るために我々は【資料 1】のような取り組みを行っている。

我々はこのような取り組みの中で、2010 年度から 2 年間にわたって、学生を対象とした調査を行った。具体的には、教員と演習補助者との指導上の相違について授業評価尺度を用いて学生の視点から分析した。これらの研究により、学内実習における教員の指導と演習補助者との指導に有意差は認められず、学内演習に補助者を導入した取り組みは、成人看護学演習授業の質を確保しているということが示唆された^{8) 9)}。そこで本研究では、演習補助者の視点から成人看護学演習を分析し、演習における大学と臨床との連携や協働の現状について示唆を得ることを目的とする。

II. 研究方法

調査期間は平成 22 年 4 月～平成 23 年 7 月である。対象は、成人看護学演習に授業の補助者として参加した臨床看護師 44 名（女性 43 人、男性 1 人）であった。調査は演習終了後に行った。「成人看護学演習における学外授業補助者のみなさまの声をお聞きし、授業参加に関する実態を調査しております。答えられる範囲で率直なご意見をお聞かせください。」という提示文を用いて自由記載のアンケートを行った。質問内容は、①学生の指導にあたり気をつけたことや工夫されたことについて、②実際に演習に参加されて改めてお気づきになったこと、お感じになったこと（発見、要望、提案など）について、③今後の学生（後輩）指導に活かそうなこと、の 3 つである。

自由記載アンケートはテキストマイニングソフト、KH Coder^{注 1)}を用いて以下の手順に従って分析した。KH Coder とは、テキストデータを計量的に分析するために作成・公開したプログラムソフトウェアである¹⁰⁾。従来の質的データの分析アプローチは、研究者がコーディング規則を独自に作成するアプローチと多変量解析による自

動化によって作成する 2 つのアプローチがある。KH Coder の特徴は、この 2 つのアプローチを統合して行うことができる点にある。すなわち、多変量解析を用いてテキストデータを要約・提示し、コーディング規則を作成し、探索的に分析することができる。まず、アンケートによって得られたテキストデータを、分析に直接関係が無い助詞や句読点を削除し、意味が共通する単語に置き換えた。このようなデータクリーニングをした後、アンケートの中で頻回に出現した上位 100 語を頻出語とし、このリストを用いて語句と語句の結びつきを表示する 2 種類の共起ネットワークを作成した。

III. 倫理的配慮

演習補助者には、事前に書面と口頭で研究の主旨を説明し、本人が特定されないこと、調査結果を研究目的以外には使用しないこと、回答内容いかににより今後の対応に影響がないこと、不参加により個人に不利益は生じないことを説明し、同意を得た。

IV. 結果

対象 44 人の自由記載によるアンケートの分析結果は【表 1】、【図 1】【図 2】の通りである。総抽出語数は 7,183 であった。アンケートの中で頻回に出現した上位 100 語は【表 1】の通りである。

出現数の多い語句ほど大きい円で描画され、これを共起ネットワーク(中心性)【図 1】にすると、ネットワークの中でそれぞれの語句がどの程度中心的な役割を果たしているのかがわかる。すなわち、水色、薄い水色、ピンクの順にその中心性が強まっていき、図の中で円の大きい中心的な語句はアンケートの内容を特徴づける語句を結び付けるハブの役割を担っている。

ネットワーク図の中で最も出現数が多かった語句は「学生」「思う」であり、次いで「指導」「演習」「感じる」であることがわかる。この共起ネットワーク(中心性)【図 1】の中で最も中心的な

語句は「演習」「感じる」であり、これらの語句を介して他の語句が結びついている。演習補助者が「演習」において、何かを「感じる」ので、多くの演習補助者のアンケートからこの語句が中心的に使用されていることは、容易に推測できる。

【図 2】は強く結びついている部分を I から V 群に分類したものである(サブグラフ検出)。概ね以下の I から V 群にまとめられた。

1. I 群「学生」「思う」「演習」「実習」「感じる」「指導」「良い」「行う」について

I 群は最も頻出した語句が使われている。「思う」「感じる」は、演習補助者が意見を述べる際に文末に選んだ語句なので、この語句は分析から除外した。具体的な回答としては、「演習と臨床で多少違うところがあり、何処まで指導してよいか悩むこともありましたが、基本を覚えてもらうことが大切なので意識して伝えました。」「演習内容はかなり臨床に近くて良かった。」などであった。演習補助者は、成人看護学演習は臨地実習や臨床現場と近い環境であると考えていることを表している。

2. II 群「緊張」「少し」「出来る」について

II 群の具体的な回答としては、「学生が楽しそうに演習している場面を見て病院での実習がどれほど緊張しているか分かった。」「一度しか演習していない事や患者さんの前で緊張してできない事もあると理解し、実習で関わろうと感じた。」「卒業してきた新人看護師もほぼ同じ状態だと思うので、緊張する手技であることを理解して指導していきたい。」などであった。これらの回答から、演習補助者は、学生が演習授業で見せる楽しそうな表情や演習技術の練習量の少なさを知り、臨床実習場面でみせる緊張した学生の姿の理由について知る機会になったと思われる。

3. III 群「違う」「伝える」「臨床」について

III 群の具体的な回答としては、「間違っているところがあっても気づくかどうか見守るようにし、気づいてないときはどこが違うのかなぜそうする必要があるのかを伝えるようにしました。」「基本的な看護技術とともに患者さんへの接し

松田麗子、大谷かがり、堀井直子、杉田豊子、荒川尚子、近藤暁子、江尻晴美、梅田奈歩、中山奈津紀、牧野典子

方、声がけの仕方などを臨床の場面を想定して伝えるように心がけました。」などである。これらの回答から、演習補助者は、看護学演習は基本を中心に教えるものであると認識していた。

4. IV群「必要」「考える」「質問」について

IV群の具体的な回答としては、「学生がどんどん質問してくるが、全てをそのまま聞いて答えるのではなく、今の学生のレベルで答えられるように考える様な発問をすることの必要性を感じた。」「清潔操作については、考えながら行なうことが必要だと思いました。」などである。演習補助者は、考えながら看護技術を行なうことの必要性を述べるとともに、自身の指導方法を振り返っていた。

5. V群「手技」「多い」について

V群の具体的な回答としては、「DVDを見て初めての手技を行なうのが難しいと言っていた学生が多かった。」「人数が多いので一人一人の手技をしっかりと見てあげることができなかった。」「基準・手順に沿った手技や速さを求めているのではないということを教えた。」などであり、演習で初めて行う技術を指導することの困難さや指導する学生数の多さについて言及する内容であった。

以上、I群とV群は演習補助者の視点から捉えた演習授業があらわされ、II群、III群、IV群は初学者に対する指導方法があらわされていた。

V. 考察

I群は成人看護学演習の環境に関する内容であった。本学科の成人看護学演習では模型、シミュレーター、医療物品などを用いて、学生が臨床をイメージしやすいような環境を整えている。アンケートを要約すると、演習補助者はこのような臨床に近い環境を生かし、学生に臨床の実際を伝えるための工夫をしている。I群より、成人看護学演習では演習補助者との協働によって、学生に臨床で活用可能な知識や技術を学習させることが可能であると言える。

II群は、看護学演習での指導を通じて演習補助者は

実習で指導する学生の学習準備状況が把握できたという内容であった。演習補助者は、演習で指導した学生達を再度、臨地実習の場で指導することとなる。演習補助者は学生の緊張した姿を目の当たりにし、臨床で実習指導をしているときの学生の姿を想起して、今後臨床で学生を指導する際には、学生は未熟で応用することに不慣れであることを考慮して指導に臨もうとする姿勢が見える。この点については榎本⁶⁾も同様の考察を行っている。演習補助者は演習での指導によって学生の思考の仕方や技術力を知り、この経験を新人看護師教育へ活かそうと考えていることも伺えた。

III群は演習補助者が看護技術の基本を教えることに関する内容であった。成人看護学演習では臨床現場において特に頻回に行う看護技術を学生が習得することを目的としている。演習補助者には事前に必要物品、手順、手技の方法などを資料1に基づいて説明している。またその際、学生の学習準備状況や看護技術にまだ不慣れであることを伝えている。このような取り組みにより演習補助者は演習授業を基本的な看護技術を学ぶ場であると認識し、学生の手技や手順を丁寧に指導することに気を配っていることがわかる。

IV群では、手技やその手順を覚えて実践するだけでなく、この技術を行う根拠を理解することの重要性を学生に伝えている。そのことを学生に気づかせるために学生への質問方法を工夫していることがわかる。また、こういう指導プロセスを通して、演習補助者は自分の指導方法を見直すことがあるという。このことに関してもII群と同様に榎本⁶⁾の主張に通じる結果となった。

V群は看護学演習の限界に関する内容であった。成人看護学演習では、講義室で看護技術の講義を行い、看護技術の手技に関するDVDを視聴させる。このDVDは成人看護学領域の教員が作成したものである。この講義が終わった後、学生は看護実習室で看護技術を練習する。学生にとって、成人看護学演習で取り組む看護技術や使用する物品はどれもが目新しく触るのも初めてであるため、手技や手順だけに意識が集中しが

ちである。そこで演習補助者が余裕を持って指導できるように、各演習で担当学生数を4から6名程度に調整している。しかし演習補助者は、手順や手技をこなすのが精いっぱいの子が多い学生が多いため、指導に時間がかかり、学生数が多いと述べている。臨床の実際を伝え、根拠を理解させるための質問を工夫しながら指導を行うと4から6名の学生数では満足いく十分な指導ができないという演習補助者の意見があらわれている。これは、指導上の限界でもあると考える。

VI. まとめと課題

本研究では、演習補助者の視点から成人看護学演習について明らかにし、演習における大学と臨床との連携や協働について示唆を得ることを目的として、成人看護学演習に補助者として参加した臨床看護師44名のアンケートの自由記載を分析した。その結果、以下のことが導きだされた。

本学科の成人看護学演習では学生が汎用性の高い看護技術を習得することを目的に、臨床でよく使用する物品を用いて、臨床に近い環境を設定している。演習補助者は、このような環境から成人看護学演習では、臨地実習や臨床現場と比較的近い環境であることを知った。演習補助者は、臨床で実践できるような看護技術を学生に教えることが演習補助者の役割であると認識し、教科書や資料の中で示されている抽象的な方法について、臨床で使える具体的な方法論を示した。また、演習補助者は、学生への指導を通じて学生の思考の仕方や、技術力を知る中で、臨床実習指導や新人看護師の育成も踏まえて自分の指導方法を見直していた。

本学科の成人看護学演習では、臨床に近い環境の設定をしてはいるものの、どうしても限界があることは歪めない。しかし、臨床で行われる技術を踏まえた指導を行う演習補助者の導入によって、その限界は緩和することが示唆された。

本研究ではテキストマイニングソフトKH coderを用いて、アンケート結果を多変量解析してアンケート内容を要約・提示した。今後さらにデータを収集する

とともに、コーディング規則を作成し、探索的に分析することが必要である。

KH Coder とはフリーソフトウェアであり次のホームページから入手・ダウンロードすることができる。

<http://koichi.nihon.to/psnl>

引用文献

- 1) 文部科学省：看護学教育の在り方に関する検討会報告，看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標，平成16年3月26日。
- 2) 森内みね子,高橋久美,若林健 他：質の高い看護人材の養成をめざして - 神奈川県立の看護専門学校の再編整備，看護教育,46(4),270-2,2005。
- 3) 高田法子，平岡敬子：ユニフィケーションモデル（Unification Model）の検討 - 臨床と大学の連携と協働の可能性 - ,看護学統合研究,2(2),1-8,2003。
- 4) 齊藤理恵子：学校と臨床が共に作り上げるユニフィケーションシステム-神奈川県立がんセンターとの連携,看護展望，33(13)，1258-1265，2008。
- 5) 鈴木妙,久保かほる：臨床指導教員導入の経緯から教育と臨床のユニフィケーションについて考える,埼玉医科大学短期大学紀要,16,47-56,2005。
- 6) 榎本康世,富岡由美，三田村友美 他：臨床指導者が学内技術演習に参加することの意味-ユニフィケーション活動をとおして-,第37回看護学会論文集（看護教育）,191-193,2006。
- 7) 厚生労働省：今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書 平成22年2月27日。
- 8) 梅田奈歩,近藤暁子,江尻晴美, 他：成人看護学演習における授業補助者導入による指導方法の評価, 中部大学教育研究, 10, 117-22, 2010。
- 9) 江尻晴美, 近藤暁子, 中山奈津紀他：成人看護学演習における授業補助者導入による指導方法の評価-2010年度と2011年度の比較より-, 中部大

松田麗子、大谷かがり、堀井直子、杉田豊子、荒川尚子、近藤暁子、江尻晴美、梅田奈歩、中山奈津紀、牧野典子

学教育研究, 11, 103-108, 2011.

- 10) 樋口耕一:理論と方法, テキスト型データの軽量的
分析—2 つのアプローチの峻別と統合—, 19, 19,
No.1:110-115, 2004.

Title: Collaborative education with part-time
assistant instructors in adultnursing
practicum at the laboratory. -From the
results of the questionnairesurvey using KH
Coder.

Adult Nursing Laboratory

Collaborative education

Part-time assistant instructors

KH Coder

Author(s):Reiko Matsuda,Kagari Otani,
Naoko Horii,Toyoko Sugita,Naoko Arakawa,
Akiko Kondo,Harumi Ejiri,Natsuki Nakayama,
Nao Umeda,Tsuneko Makino.

Address(es): Department of Nursing , College
of Life and Health Sciences, Chubu University,
1200 Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi 487-8501,

資料 1. 成人看護学演習における演習補助者に対する事前ガイダンスと配慮

- ① 演習前のオリエンテーションでは学生のレディネスを説明し、初めて実技を行う初学者であることを伝え、
たうえで看護技術手順、演習スケジュール等の説明をしている。
- ② 成人看護学領域で作成した技術手順の DVD を演習前に見てもらい指導方法の統一化を図っている。
- ③ 演習前に授業の準備された実習室に案内し、指導を実施する環境を確認してもらうことでイメージ化を図
っている。また、実習室では、演習で使用する物品や器材等の最終確認を行っている。
- ④ 演習スケジュールは、教員による一斉講義を学生と一緒に受講し、その後、実習室で少人数グループに分
かれて技術指導を行う。
- ⑤ 演習補助者がタイムテーブルに沿って指導が行えるよう、必要時に教員がサポートがある。
- ⑥ 実習室では教員の近くに配置し、不測の事態に備えていつでも教員がサポートできる体制を整えている。
- ⑦ 演習開始時に担当の演習補助者を学生全体に紹介している。

表 1 アンケート内容を特徴づける頻出語（上位 100 語）

抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数
学生	95	清潔	13	行える	8	使う	6	持つ	5
思う	88	やすい	12	自分	8	初めて	6	実践	5
指導	40	緊張	12	手順	8	書く	6	手	5
演習	39	講義	12	場面	8	新人	6	受ける	5
感じる	39	質問	12	積極	8	針	6	心がける	5
良い	38	少し	12	大切	8	前回	6	進める	5
行う	33	多い	12	改めて	7	褒める	6	操作	5
実習	32	違う	11	基本	7	イメージ	5	内容	5
説明	30	手技	11	使用	7	スムーズ	5	発問	5
患者	25	出来る	11	助言	7	学内	5	不十分	5
良かった	23	聞く	10	難しい	7	感じ	5	シート	4
実際	21	グループ	9	病棟	7	記録	5	トレーニング	4
声	21	確認	9	ほしい	6	現場	5	プラン	4
見る	17	時間	9	もう少し	6	戸惑う	5	安全	4
考える	15	注意	9	ベッド	6	困る	5	学習	4
伝える	15	理解	9	意識	6	参加	5	活かす	4
臨床	15	学ぶ	8	教える	6	仕方	5	慣れる	4
気	14	気づく	8	言葉	6	子	5	環境	4
必要	14	技術	8	今	6	試験	5	関わる	4
看護	13	言う	8	最初	6	事前	5	疑問	4

松田麗子、大谷かがり、堀井直子、杉田豊子、荒川尚子、近藤暁子、江尻晴美、梅田奈歩、中山奈津紀、牧野典子

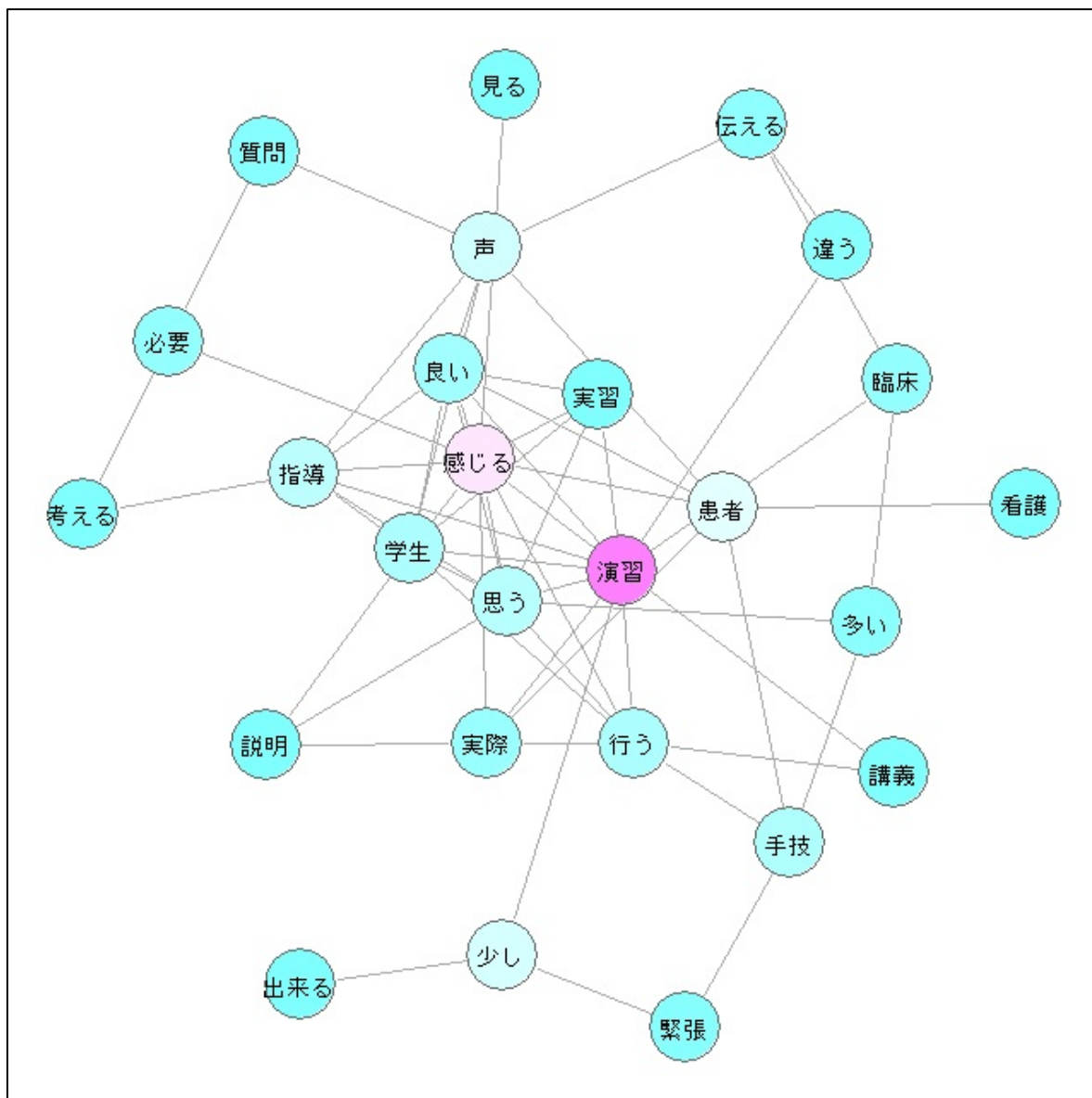


図 1. 共起ネットワーク（中心性）

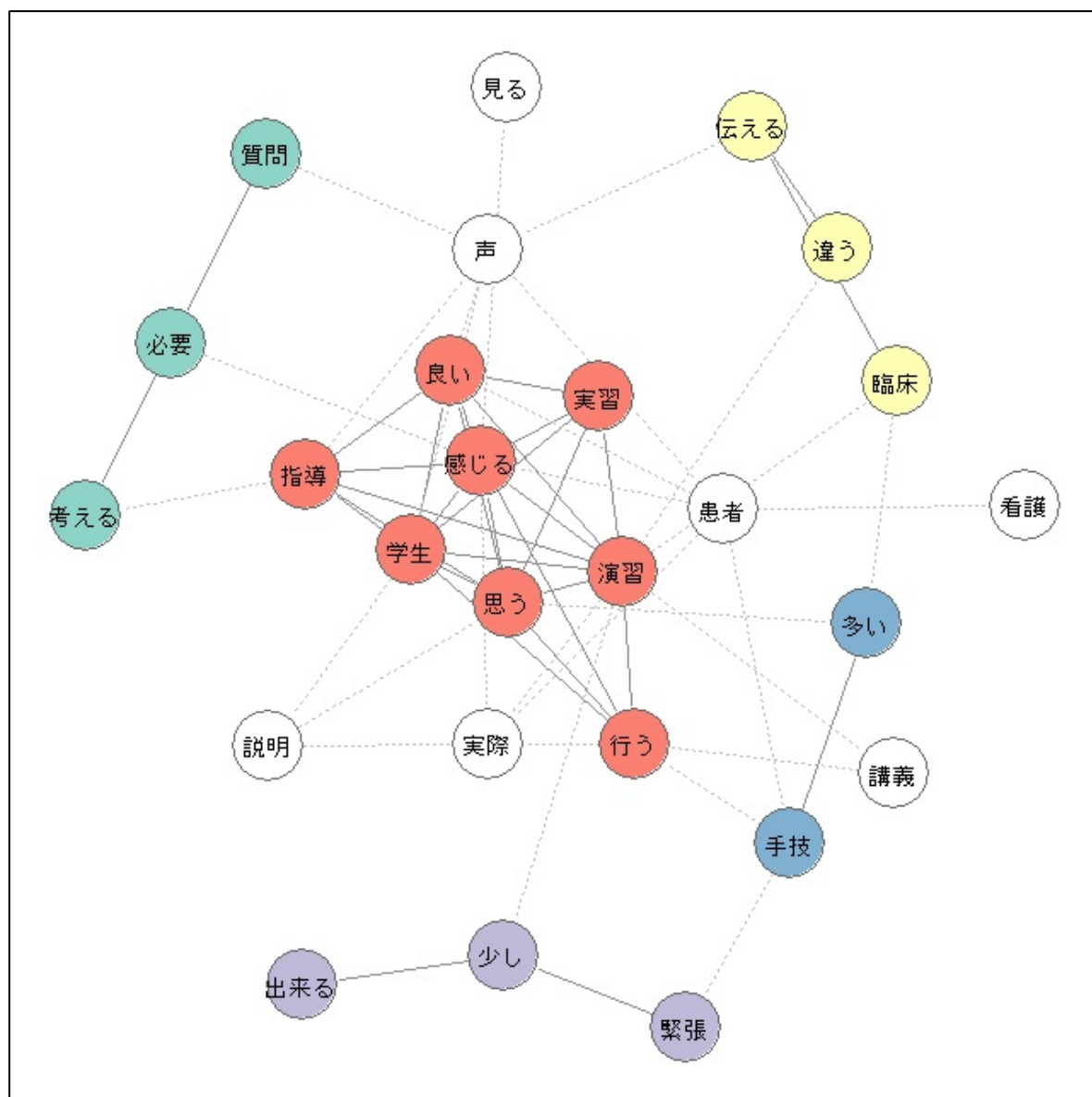


図 2. 共起ネットワーク (サブグラフ検出)